

2009年9月21日

立正大学経済学部・ユーラシア研究所共催
シンポジウム「日本のユーラシア戦略」

第2報告「中国の国際戦略における中央アジアの意味」

趙 宏偉（ちょう こうい、ZHAO, Hongwei）

中国の集団主義外交の始動の地域

中国の外交は、およそ鄧小平時代まで（～1994年）非同盟、二国間外交を中心、多国間会合を拒否、国際責任を回避といったものを特徴とし、一種の孤立主義外交であった。ほぼ1995年から、江沢民時代の始まりに伴って、中国の外交は集団主義外交へと根本的な転換を始めた。その中で対中央アジア外交は、中国の初めての集団主義外交であった。

中国の安全保障の要

北京の立場に立ってみると、「三種勢力」（恐怖主義（テロリズム）、分裂主義（民族独立運動）、極端主義（宗教原理主義））は、安全保障上の現実的な脅威である。

中国西部の経済福地

中央アジアは中国にとって潜在力が富む市場、エネルギー等の供給地、有望な投資地。

中口からなる神聖同盟

中口と中央アジア諸国は、西側の民主主義の浸透を阻むことにおいて、利益の一致をみせ、既存体制を維持する「神聖同盟」を結成している。

大陸アジアを束ねるコア

中口は中央アジア4カ国との上海協力機構をコアに、安全保障、経済発展、体制維持を演出して、イランから以東の大陸アジアを束ねる。

中口による「西側のないユーラシア体制」

上海協力機構は「西側のないユーラシア体制」を目指している。

中国の次期経済圏

中国はアセアン+1（中国）からなる20億人の自由経済圏を成功させている。いま取り込み中の自由経済圏は上海協力機構を中心とする大陸アジア地域である。

ダイナミックス&アキレス腱としてのロシアとアフガン

中国の中央アジア外交の主なリスクとしては、2つあげられる。

まず、ロシアの動揺である。上海協力機構には「欧亜経済共同体」「独立国家連合体（CIS）」で結ばれているロシアと中央アジア4カ国+1（中国）という構図が存在している。

次に、中国はアフガニスタンと陸続きの唯一の世界大国、安保理常任理事国としての国際責任を背負っている。ナトーの撤退と中国の責任が語られる日が予測される。

参考文献

趙宏偉（執筆者）「

」、MGIMO. 2009.

趙宏偉（研究代表）2004年度～2005年度日本学術振興会科学研究助成金基盤研究C研究成果報告書「非同盟の中国式孤立主義から集団安保主義へ」（研究代表 趙宏偉）

趙宏偉（研究代表）2006年度～2007年度日本学術振興会科学研究助成金基盤研究C研究成果報告書「中国の国際新秩序と中口印協調体制の始動の研究 上海協力機構の研究を中心に」